



TITLE:

表紙・投稿規定・人のうごき・プレプリント・編集後記・目次・裏表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙・投稿規定・人のうごき・プレプリント・編集後記・目次・裏表紙ほか. 物性研究 1970, 14(2): 132-177

ISSUE DATE:

1970-05-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88107>

RIGHT:

昭和42年11月14日 第四種郵便物認可
昭和45年5月20日発行(毎月1回20日発行)
物性研究 第14巻 第2号

vol. 14 no. 2

物性研究

1970 | 5

1. 本誌は、物性物理の研究を共同で促進するため、研究者がその研究意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、情報などです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査は行ないません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不適当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で **private communication** 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 雑誌のページ数を節約するため原稿は極力簡潔にお書き下さい。
2. 原稿は400字詰原稿用紙を使用して下さい。
3. 数式、記号の書き方は **Progress, Journal** の投稿規定に準じ、ミスプリントが生じないように適当な処置をとって下さい。

上ツキ、下ツキは特に紛わしいもののみを指定して下さい。

英字の大、花文字、ギリシャの指定を忘れないように、**o** と **a** と **0** (ゼロ)、**u** と **n** と **rr**、**c** と **e**、**l** (エル) と **1** (イチ)、**x** と **×** (カケル)、**u** と **v** 等が一番間違いやすい。

4. 数式は3行にわたって大きく書いて下さい。
5. 1行以内におさまらない可能性のある長い数式等は必ず改行の際の切れ目を赤で指定して下さい。
6. 図の縮尺、拡大は致しません。一頁以内に入らない図は原則として著者に返送し、書き改めていただきます。
7. 投稿後の原稿の訂正はできるだけさけるようにして下さい。
8. 別刷が入用な場合は、投稿の際に所要部数を10部単位で申込んで下さい。別紙代は下記方式により、**現金で納入**していただきます。

(郵券による受付はいたしません。)

p : 物研出来上り頁数

x : 別刷所要部数

a : 別刷一頁の代金 1円

b : 製本代(別刷一部につき) 10円

別刷代 = (**a p** + **b**) **x** + 送料

別刷代金は別刷を受取ってから、1ヶ月以内に納めて下さい。

それより遅れた場合には遅滞追徴金を請求されることがありますから、御注意下さい。

9. 原稿締切日は毎月20日で原則として次月発行誌に掲載されます。

1. 本誌は、物性物理の研究を共同で促進するため、研究者がその研究意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、情報などです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査は行ないません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不適当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で **private communication** 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 雑誌のページ数を節約するため原稿は極力簡潔にお書き下さい。
2. 原稿は400字詰原稿用紙を使用して下さい。
3. 数式、記号の書き方は **Progress, Journal** の投稿規定に準じ、ミスプリントが生じないように適当な処置をとって下さい。

上ツキ、下ツキは特に紛わしいもののみを指定して下さい。

英字の大、花文字、ギリシャの指定を忘れないように、**o** と **a** と **0** (ゼロ)、**u** と **n** と **rr**、**c** と **e**、**l** (エル) と **1** (イチ)、**x** と **×** (カケル)、**u** と **v** 等が一番間違いやすい。

4. 数式は3行にわたって大きく書いて下さい。
5. 1行以内におさまらない可能性のある長い数式等は必ず改行の際の切れ目を赤で指定して下さい。
6. 図の縮尺、拡大は致しません。一頁以内に入らない図は原則として著者に返送し、書き改めていただきます。
7. 投稿後の原稿の訂正はできるだけさけるようにして下さい。
8. 別刷が入用な場合は、投稿の際に所要部数を10部単位で申込んで下さい。別紙代は下記方式により、**現金で納入**していただきます。

(郵券による受付はいたしません。)

p : 物研出来上り頁数

x : 別刷所要部数

a : 別刷一頁の代金 1円

b : 製本代(別刷一部につき) 10円

別刷代 = (**a p** + **b**) **x** + 送料

別刷代金は別刷を受取ってから、1ヶ月以内に納めて下さい。

それより遅れた場合には遅滞追徴金を請求されることがありますから、御注意下さい。

9. 原稿締切日は毎月20日で原則として次月発行誌に掲載されます。

第49回 研究部員会議議事録

1970年2月26, 27日

於 基礎研小講議室

議 長 木 下 紀 正
田 中 正
長 岡 洋 介

出 席 者 運 営 委 員 1 6 名
研 究 部 員 2 7 名
所 員 6 名
オ プ ザ ー バ ー 2 名
研究計画提案者 1 6 名

議 題 1. 議長団報告
2. 基 研 報 告
3. 所 長 問 題
4. 新研究部員承認
5. 外 人 招 聘
6. 研究計画提案
インフォーマル・ミーティング
7. 研究計画決定
8. 所長問題 (つづき)
9. 所員公募について
10. 旅費規定について
11. そ の 他

資 料 「京都大学基礎物理学研究所協議員会規程一部改正案」

資 料

1. 議長団報告（田中）

- 議題説明
- 核特委において将来計画が重大な段階になつている。今夜会議終了後、核特委有志の提案で将来計画について懇談会を行ないたい。
- 議長団と基研事務職員との懇談会を研究部員会議の前日に、従来行なつてきた。その中で、職員研修がとり上げられてきた。これを従来通り行なつていくかどうか議論され、結論として「研修旅行の予算をとつておいて議長団と職員との話し合いが、この部員会議中にまとまれば、今回結論を出す。まとまらなければ、次回部員会議までに両者が話し合つて、その結果を次回部員会議で判断する。それまでは従来通りとし、打切る場合は、その予算は研究会旅費にまわすことにする。」

2. 基研報告（湯川）

○ 所員異動

- a 転入，採用，昇任なし
- b 転出，退職

北門助手（昭和45年4月1日付で東大教養学部へ転出の予定）

米沢助手（昭和45年5月1日付で東京工業大学へ転出の予定）

○ アトム型研究員

広野義之（広島大・理，講師） 昭 44. 11. 9 ～ 44. 11. 28

小川建吾（東大・理，助手） 昭 44. 12. 1 ～ 44. 12. 15

生井沢寛（成蹊大・工，講師） 昭 45. 1. 30 ～ 45. 2. 14

宮崎 忠（東大・理，D2） 昭 45. 2. 10 ～ 45. 2. 14

昭 45. 2. 23 ～ 45. 3. 19

○ 外国人招聘

William R. Datars （カナダ，マックマスター大学理学部教授）

昭 45. 1. 1 ～ 45. 2. 28

○ 協議員会規程一部改正案

（資料参照）

○ 教官の外国出張期間延長

中野武宣助手（昭和44年9月1日から昭和45年8月31日までの

ところ、昭和45年9月1日から昭和46年8月31日まで1年間延長)

○ 共同利用宿舎の略称

数理解析研と協議の結果「北白川学舎」と略称を決めた。

○ サプリメントについての報告(牧)

69年度

№43 「A General Survey of the Theory of the
Bethe-Salpeter Equation」

№44 「Spatial Correlation Functions for Quantum
Systems」

№45 「Fire Ball」 (現在印刷中)

70年度

現在計画中のもの

№46 「Some Topics in the Theory of Lattice
Dynamics」

№47 「固体論の諸問題」(仮題)

№48 「坂田理論15周年に関連したもの」

その他話題のでているもの

・ Statistical Physics of Random System

・ Nuclear Matter

・ Second Order Phase Transition

○ 協議員会規程改正に関する議論

小沼 この結論は報告をして、意見を求め、了承されたということではないか。
教授会の構成と権限の問題とからんでいることだから、形式的な問題だけではない。

湯川 このまま決まるとわかっているものではない。大学当局から問題がでるとすれば人事の件であろう。

小林 学内事情を説明すれば、最近霊長類研究所が構成員(所員)に拡大することが評議会でも認められた。食糧科学研究所では、かなり前から構成員となつている。実質的には現在までもオブザーバーとして助手の方も出

資 料

席しておられるのでかわりはない。

沢田 基研の運営については部員会議，運営委員会で決つたことを確認するといふやり方は変りないのですね。

湯川 学内問題については協議員会で処理することもあるが，その他の重要事項は，部員会議，運営委員会にはかつている。

議長 基礎研の性格からして，主旨に異論はないと思う。

3. 所長問題

○ これまでの経過報告（議長（田中））

6月，11月の部員会議で討論されてきたが，11月の部員会議では次のような結論がでた。

「湯川先生停年後の基研所長は，基研の国際的・国内的な地位と役割を維持し発展させてくれることが望ましい。日本の研究水準の向上にも努めてもらいたい。

具体案としては

- A. 任期5 ± 2年の教授を公募し，在職中の教授から任期2年（重任は可能）の所長を選出する。（所長在職中は教授の任期に数えない）
- B. 最所から所長としてきていただく人を選ぶ可能性，その場合任期は所長としての任期4年（重任は可能）と教授としての任期，5 ± 2年の和。いずれの場合にも運営委員会が A, B のいずれを選んだかも含めて，所長候補の原案を研究部員会議に示し，承認を求めるものとする。」

○ 運営委員会の報告（湯川）

運営委員会の結論のまとめとして

- ・ 実際の人の名を出さずに B が望ましいか否かを議論するのはむずかしい。
- ・ A 案を2つに分類した。
 - A₁ — 新しい教授が決つて，4人の教授の中から所長を選ぶ。
 - A₂ — 現職の3人の教授の中から所長を選ぶ。
- ・ A 案に対する可否投票（無記名）の結果

可 13 白 1

となり、A案でいくことになった。

・又、 A_1 、 A_2 どちらの方法にするかの議論があつたが

1. 空白期間が長すぎると困る
2. 任期1年の所長も困る

ということで、「実質的に A_2 」という意見が多かつた。

議長（田中正） A案の背景では、現状を過渡期として捉えていると思う。

松田 A案では事務取扱的な色彩が強い。所長事務扱いという名にしておく方がよいのか。所長でいいのか。

湯川 私が所長をやめて、後任を決められないで万策つきたら、事務扱いとするより仕方がないが、決められるものなら、事務扱いとしない方がよい。

議長 事務扱いでは「魂」抜きということになる。これまでの議論では集団指導的なイメージがあつたと思う。

松田 研究所の所長にはいろいろな type があつて、ここでは所長の指導力が大きかつた。事務取扱的に変つてしまうことがいいことかどうか、私は物性関係でよくわからないが、素粒子ではどうか。

湯川 影響力が大きすぎたのではないかと反省している。今はいろいろな意味で過渡期にきているので、将来のことは過去にとらわれず、考えていくべきであると思う。所長問題の議論に集約しているが、基研の将来を過去にとらわれずに考えていただきたい。今までの基研にとらわれず、新味をもつたものに脱皮していかなければならない過渡期である。脱皮には時間がかかる。急にどうするかは、私が若かつたとしても観念的な議論はできるが、学問の内容をふまえてどうしたらよいかを決めるのはむずかしい。所長個人の問題でなく、研究所全体が模索していくことが必要で新味のあつたものをさかし出していくのがよい。私がいいたいことは、今までのあり方はあり方として適当に評価してもらつて、これからは過渡期と考えてもらいたい。逆にいうと、いい機会だ。全体の問題はゆつくり考えてもらいたい。

宮沢 A・B案は今回だけのことか、Aなら2年たつたらどうするのか。

松田 今回かぎりだ。

資 料

湯川 その点をもつとはつきりさせた方がよいのなら、そうしたらよい。

議長 過渡期だということは、AでもBでもそれほど強い差はないという意見も出された。Aでも2期つとめればB的になる。しかし2年後について又慎重な議論がいるだろう。

横山 理論研で議論した。PrincipleとしてAがいいか、Bがいいかでなく、しょうがないという考えた。Principleか技術的なことかをはつきりさせた方がよい。Aで出発してもBに切り換えられるかどうか、もつと議論しておいた方がよい。

沢田 transientな状況はしばらく(1~2年は)つづくと思う。次回のことについてもAかBか今は判断しにくい。その意味ではtransientな状況をしばらくつづけてみたらよいのではないか。

田中 Aは原則ではなく、現状認識から出ていると思う。

湯川 transientな状況はそれほど長くないのではないか、所員の交替は数年中にある。そうすれば別のstableな状態にうつると思う。

山口 Bに決らなくて残念だが、Aなら今回限りにしてもらいたい。まともとあいまいにならないように。

湯川 その考えと矛盾するのは重任の場合である。

山口 重任はequalの資格だということだからよい。

湯川 そう了解されるならよい。

牧 A、Bは今回だけのことだということははつきりしている。しばらくたつて、AかBかを考えると意味が変わる。湯川先生のリーダーシップを期待しているという意味でのAだ。将来、AをやつてもB的になることがありうる。

山口 私もそう了解している。Aなら2年の任期が終るまでに必ず議論することを決めておかねばならない。2年後議論しても解決がつかない場合に つづける。

森田(正) transientはよくわかる。京大の学内の先生が何人もいらつしやるのに、Aになつたのはどういう理由だつたのか、併任教授や運営委員の方がいらつしやるのにどうして現職に限つたのか。

牧 森田氏のいわれたことは、ここではBとして考えたのではないか、特殊

な例では数研の所長は理学部教授で、数研では併任である。それを除けば森田氏のいわれたのはB。

湯川 それらがこれまで議論されなかつたのは、 $A \cdot B$ を考えてどうしても適当でないとき、 $B' \cdot C$ が考えられたのだろう。考える順序としてそれがでてこなかつたということではないか。

議長 森田氏の提案を second する人は？

森田 (正) 私の考えはむしろ A_3 だ。

議長 在職の教授というのは、どういうイメージだつたか？

玉垣 私は基研教授というイメージをもつた。

山口 前回は運営委員会に委せたのではなかつたか。

小沼 議論の進め方は、前回の運営委員会の結論を了承するか否か。了承しないなら、 A か B かの逆の案が新しい可能性を考えることになる。

湯川 よほどの理由がないかぎり A_3 や B' がでてくるのは前回の部員会議の決定に反する。

議長 運営委員会が A 案になり A_2 に支持が多かつた。formal な適用は今回に限る。採択の方法挙手か否か？ 挙手で決めたことはないが。

山田 2年になる前に議論をすることを前提に A_1 か A_2 かの detail は運営委員会にまかせればよい。

湯川 次元の高い話ではないが、手続き上、 A_1 では事務取扱いをつくらねばならない。

沢田 研究者側のわがままを通すことに湯川先生が努力してこられたが、これからは外に対する（対文部省など）交渉を考えると、なるべく事務取扱いでなくしてほしい。

板橋 「在職の教授の中から」を前提として議論するのか。基研専任の教授と確認するのか、その下での $A \cdot B$ を議論するのか。

議長 A というとき、その了解の下で運営委員会が決めたと思うので、在職とは専任と解釈した。

位田 2年たつて、教授ポストが空いてなくても B の可能性があるか。

湯川) 必ずしも不可能ではない。ある巾をもたせれば、
小沼

資 料

位田 暫定的にAでいくといつても技術的に困難だから、Aでいつまでもいくということになつては困る。

森田(章) A_1 と A_2 は技術的な問題ではない。どちらかを決めるべきだ。新教授をとることが決つていゝのなら、理念的には新教授が決つてから決めるべきだ。新教授かなかなか決らなければ現在の3人から決めるということにしたらい。

議長 適用は今回に限るということで、まず運営委員会の結論であるA案に賛成かどうか採決をする。

玉垣 採決に運営委員は参加しない。

採決の結果

A 案に	賛成	2 2
	反対	1
	保留	3

室田 Aは2年を transient に決めたが、新教授が着任するのに1年近くかかることを考えると A_2 がよい。

森田(章) A_1 として6月に決められなければやむをえず A_2 にすることとして、それまでは努力すべき。

湯川 6月にたとえ決められてもすぐ着任できることはまずない。

末包 湯川先生がやめられた後、基礎の運営上、事務取扱いでよいのか。

森田(章) 私は重要なポストだからこそ、杓を抜けて考えたらいと思つた。早い段階で決めることを念頭において発言したので、むずかしいなら私の意見はとり下げる。

事務長 早くて10月頃。

湯川 半年から場合によつては1年かかる。

山田 detail といつたので技術的だといつたのではない、筋と誰かいわれたが、すじの問題ではない、長い間空白期間をおかない方がいいというのも広い範囲から選びたいというのも、希望条件であると解する。ここに運営委員の方が多く出席しておられるので、聞いておいていただくということで再び提案する。

「これまでの意見を運営委員会に伝え、決定を運営委員会にまかせる」

山田提案の採決結果（運営委員は採決に加わらなかった）

支持 19

反対 6

保留 3

以上の結果 A_1 か A_2 かの決定を運営委員会に委ねることになった。

4. 新研究部員の承認

◎ 素粒子・原子核関係（改選10名）

- ① 大 貫 義 郎（名大・理）
- ② 益 川 敏 英（名大・理）
- ③ 松 本 賢 一（金沢大・理）
- ④ 栗 山 惇（九大・理）
- ⑤ 永 田 忍（京大・理）
- ⑥ 中 野 堇 夫（大阪市大・理）
- ⑦ 西 島 和 彦（東大・理）
- ⑧ 川 口 正 昭（阪大・基礎工）
- ⑨ 古 市 進（立大・理）
- ⑩ 山 本 邦 夫（阪大・教養）

次 点

1. 並 木 美喜雄（早大・理工）
2. 中 川 昌 美（名大・理）
3. 池 田 清 美（東大・理）

◎ 物性論関係（改選5名）

- ① 勝 木 渥（信州大・理）
- ② 渡 部 三 雄（東北大・理）
- ③ 立 木 昌（東北大・金研）
- ④ 宮 原 将 平（北大・理）
- ⑤ 中 野 藤 生（名大・工）

次 点

1. 三 輪 浩（阪大・理）

資 料

2. 中 嶋 貞 雄 (東大・物性研)

3. 長谷川 正 之 (東北大・理)

(註) 次点者が素粒子・物性とも3人ずつ同点であつたので、順位をつける必要がある旨指摘された。議長団が、部員が一部大学に集中しないように考慮し、素粒子部門では、並木美喜雄氏を次点1位とし、残る2名について抽選の結果、中川昌美氏を次点2位、池田清美氏を次点3位と提案、物性部門は、三輪浩氏、中嶋貞雄氏、長谷川正之氏の順と提案。これにつき「かつて地域調整は行なわないと決めたことがある」というコメントがあつたが、今回は次点・同点者の順位の問題であるので、議長団の提案通り承認することとした。

5. 外 人 招 聘

別表の各人につき関係者からそれぞれ説明があつた。

湯川 Flato, Sternheimer, Simon の3氏は invitation と、滞在費の support があれば旅費はフランス側で出るというので、そういう可能性はあるという返事を取りあえず出した。滞在費は出すにしても、3人とも出すという必要はないと考えている。

宮沢 外人若手の fellowship 的な希望が出ているが、外人団の fellowship を積極的に考えたい。

河原林 A.M. Brett は、横山氏から聞いたと言つて本人から fellowship を申込んできたが、一応ことわつた。

議長 特にコメントがなければ、あとの人選は運営委員会にまかせる。

滞在希望者

外国人滞在希望者一覧

氏 名	所 属	希望滞在 期 間	提 案 者
Prof. M. Flato	H. Poincare Inst.	'70.8	(湯川)
Prof. P. Sternheimer	"		
Dr. A. Simon	"		
Dr. N.M. Nieto	Niels Bohr Inst.	'71.1~8	(湯川)
Prof. D.B. Lichtenberg	Indiana Univ.	'70.9	(牧)

Prof. J.Schwinger	Harvard Univ.	'70.4~5	(宮沢)
Prof. L.Halpern	Univ. of Windsor, (Canada)	'70.7	(内山)

原子核関係

Prof. J.Eichler	Hahn-Meitner Inst. (W.Berlin)	'70.8~11	(田中一)
Prof. M.Harvey	Chalk River Nucl. Lab. (Canada)	'70.4	(玉垣)

物性関係

Dr. P.C.Hohenberg	Bell Telephone Lab,	'70.9	(松田)
Prof. D.Pines	Univ. of Illinois	'70.9	(松田)
Prof. A.A.Abrikosov	Academy of Sci. of USSR	'70.9~10	(松田)
Prof. S.Choi	Univ. of North Carolina	'70.7	(武野)
Dr. P.W.Anderson	Bell Telephone Lab.	'70.9	(松田)
Prof. H.Meyer	Duke Univ.	'70.9~10	(永宮)

Fellowship 的な Post への Application

推薦者

Dr. K.Buchner	Max-Planck Inst. (München)	'70秋から	(中村 誠)
Dr. P.Rotelli	Imperial College (London)	'70.10 or '71.9	(Prof. P.T. Matthews)
Dr. C.Vossler	Argonne National Lab.	1年 or 半年	(宮沢)

尚、昨年11月の部員会議で名前の出た Ogloven 氏はとりさげ、他に A.M.Brett, F.Capra 両氏から Fellowship 的な申し込みがあつたが、困難だということで一応断わつた。Capra 氏は学振に apply したいという手紙がきている。

6. 研究計画提案

長期・短期研究計画の提案者から、それぞれの計画について説明があり、

資 料

質疑がおこなわれた。

モレキュール型計画の個々の説明は、時間が足りないため、インフォーマルミーティングの中でおこなわれることになった。

予算と要求内容について基研側から次の通り説明があつた。

旅費予算見込額 690万円 A

研究部員会議運営委員会	110	}	B
所員自由研究費	30		
旅費つき懇談会	10		
職員研修 ¹⁾	5		

$$(A - B) \times \frac{2}{3} = 356 \text{ 万円}$$

↑

年間予算のうち今回配分すべき割合

旅費要求額

長・短・モレキュール 502.5万円

アトム型²⁾ 238.8

計 741.3万円

校費要求額

169.4万円

(註) 1) 議題1 参照

2) アトム型研究費申込 りちわけ

総 数	32 名	期 間	所属大学分布
D ₁	7	1～2ヶ月未満	16 名
D ₂	6	2	10
D ₃	6	3	3
助手・助教授	10	4～6ヶ月未満	2
そ の 他	3	6ヶ月以上	1

他1人づつ 9

討論の結果、アトム型については議長が次の通りまとめた。

1) あまり長期間の希望は遠慮してもらう。

- 2) 研究条件の悪いところの人を優遇する。
 - 3) はじめての人を優先
 - 4) 選考はなるべくおこなうべきでないが、抽選をするほど簡単化するのは問題だ。
 - 5) 同じ大学からの希望者が非常に多いことは考慮すべきことかも知れぬ。
- 5時から6時30分まで素粒子と物性の2つのグループに分かれて informal meeting を行なった。

7. 研究計画決定

informal meeting 座長の報告

長崎 「惑星間空間物理学と太陽系の起源の諸問題」と、「宇宙空間物質の研究」の2つの研究会は、宇宙研に申し込んではどうかという意見もあったが、ギリギリの線とは、どの辺までいけるかを議論した。「素粒子の弱い相互作用」は、研究会が後半なので、その分は後半にふたたび申し込んでくれるというので20万円にした。

核構造は、後半にまわしたらよいということで見送った。モレキュール型は、全体的に総花的になつた。

森田(章) 「物性若手夏の学校」と「物性若手による研究会、物性物理学及びそれにたずさわる研究者の現状批判」に議論が集中した。

「夏の学校」の講師等に支払われるお金を、基研の費用で出すのは、筋が通るかどうかわからない。

「多体系量子論と天体」は、計画自体が控え目で、提案どおりになつた。

「分子結晶における相転移と分子運動」については、プレッシャーがかかりすぎたかもしれない。

「物性若手による研究会・物性物理学……」については最終的には、問題提起はよくわかる。成功するかどうかの危険率が高いのだけれど、世話人に準備を徹底してもらうことで、物性の側では一応認めることになつた。額としては、これ以上削つては意味を失う。

玉垣 「核構造」に関して、9月に研究会を開く予定だけれど、それまでに準備を十分にやりたいと考えている。6月に研究計画が通るということに

なれば、準備のスタートがおくれがちになるので、今回認めてほしい。全体として、7掛け、8掛けで計画が認められたのには疑問がある。「素粒子物理学の将来」は大幅に減額されているが、それで研究会が出来るのか？

又、「物性若手による研究会・物性物理……」より、「核構造」の方が計画も練れているし、優れていると自負している。

核構造が後半再提案にまわらねばならない理由が納得できない。

末包 「核構造」は、部員の原子核関係者全員が提案しているのだから、最優先されたい。

— それはよくないの声 —

又、「物性若手による研究会・物性物理……」について、物性の研究者の方々は基研がお金を出して、現状批判をしてもらわなければならないのか。

小沼 「弱い相互作用」は計画が練れていないからというのではなく、後期に申し込んでも、研究会の時期からみて間にあうと判断したのだ。原子核の方も、計画が練れていないというようには考えられない方がよい。

末包 そうは考えていない。

高田 後半に申し込むことで、自分は了承した。

板橋 「宇宙空間物質の研究」の提案説明者が、Informal meeting には、出てこられなかつた。又、参加者も、京都地区25名等と書いてあるにもかかわらず、代理の人も出てこなかつたのは、おかしい。

田中(正) C R C の実行委員会が名古屋で行なわれているので、そこへ参加しているのではないかと思う。

板橋 やはり、説明に誰か出てきた方がよかつた。意義等を論じているのではない。

田中(一) 一律6掛けでとるというより、思い切つたことをした方がよい。組み直したらどうか。

山田 これまで時間をかけているのだから、組み直すならもつとつめて議論する必要がある。

木下 「素粒子物理学の将来」について、昨日の部員会議ではかなり支持があ

つた。

25万までは削られても、なんとかやるが、今のままではとても困るので、復活要求する。

長崎 「宇宙空間物質の研究」を後期にまわし、「物性若手による研究会…」をやめて、「核構造」を復活したらどうか。

玉垣 提案者の一人である高田氏が後半にまわすことを了承したのだから、核構造は後半再提案でよい。しかし、計画が出たから認めるという必要はない。不十分な計画は認めず、再検討に附すべきだ。

「物性若手による研究会……」は後期に再提案でどうか。

田中(一) 「物性若手による研究会……」をおとし、「宇宙空間物質の研究」は宇宙研で行なうことを試みてはどうか。

田中(正) 部員の提案した計画は優先してほしいという発言に対して、笑い声があつたが、数年前までは、部員の主体的な計画立案の必要性が強調された。

松田 「素粒子物理学の将来」に対する informal meeting での評価は？
又、(後半)というのは、自動的に認められるということか。全体として、プロジェクト的なものにかたよりすぎているので、「現状批判」のような研究会を積極的におしたいという意見も informal meeting であつた。

小沼 (後半)というのは、再提案するということだ。

田中(一) 現状を考えてみよう、批判しようというだけでは、研究会は成り立たない。そこに何かとつかかりがなければならない。

研究者批判とはどういうことか。

長岡 暗中模索の時代ではあると思う。とつかかり、ひつかかりというのは何か具体的に形になつたものである必要はない。

森田(章) とつかかりのあるプロジェクト的な研究会であることはない。提案者の自由な発想で、研究会を開き、そこから出てきたものに対しては、厳しく、見るという操作をしてゆきたい。

成功するかどうか、危険性がある研究会を support するべきだ。

湯川 「物性若手による研究会……」では、半分以上は、自己批判になるだろ

資 料

うと思う。他者を批判することは、同時に自分をも批判することも含まれるし、それならば、意義のあることだ。

ある部分の人が、ある部分の人を批判するということは、全く、根本的なものにはならない。

武野 「物性若手による研究会……」の提案者とよく話し合つたのだけれど、自分は、自己批判等の問題は自分の問題としてとらえ、日常考えていくべきことで、研究会を持つことはないと思つていたのだけれど、自己批判をも含めて、新しいものを生み出す方向に持つていくということであつたので、支持するし、皆さんにも、支持して頂きたい。

田中(正) 危険性の高いものをやめればよいとは言つていない。部員の方は現状を、どう思い悩んでいるのか、若い人にどう思い悩ませるのか、若手の中に飛び込んで議論していくつもりがあるかどうか、素粒子の問題も含めて、お聞きしたい。特にここでいう「若手」の助手層であり、いわば中堅だ。「やらせてみては」という第三者的態度では困る。

松田 若手・古手は年令では分けられない。

断絶というより、研究者間に意見の違いがあるということだ。

長岡 「思い悩む」という事を持ち出して議論することがなかつた。悩みの顕在化、自己批判等、自己の内面的な問題とからめて、出てくるのは必要であつた。物性研究者は出て来たことにとまどうと同時に、必要なことだと感じている。

長崎 「宇宙空間物質の研究」，「素粒子物理学の将来」，「核構造」，「物性若手による研究会……」に対して座長・議長で相談したらどうか。

松田 「素粒子物理学の将来」をどう評価されているのか。問題はなかつたのか。

田中(正) 三者（宇宙線・素粒子・高エネルギー）の研究内容に於る交流を、若手がやるということは、評価している。

玉垣 物理の次元で討論がなされているので認められる。研究会を12月にやつて、6月にやるというのは、時期としてはやいような気もするが、素研問題の進行からしてあまり遅くない方がよいと思う。20万では少ないのではないか。準備を密にやつていただきたい。

小沼 昨日の長谷川さんの説明をきいて「宇宙空間物質の研究」は、研究会の時期が重要な要素だと思つた。だから、後半に再提案というのは、よくないと思う。長谷川氏が公用出張ということで Informal meeting に出てこられなかつたのだから、出張先と連絡して原案でよいかどうか、宇宙航空研にまわす可能性がないかたしかめたらよい。それにしても、京都地区参加者が25名もいるというのに、一人も Informal meeting に出てこられないのは遺憾だつた。

「惑星間空間物理学と……」について、宇宙研でやれないかと、打診したのだけれど、ダメだつた。この研究会は認めてほしい。

木下 議長，座長で若干の手直しをしたい。「物性若手夏の学校」についてはどうか。

森田(章) 「物性若手夏の学校」に0解答はしのびない。しかし、これは、前例としない。

牧 「夏の学校」的なものに、お金を出すかどうかは、10年程前に議論があつた。その時は、講師等の費用を基研から出すのはおかしいということであつた。素粒子に関しては、科研費から出していた。去年は、科研費を返上するという特殊的な事情があつたので認めた。

物性に関しては、去年の額を上回るのはおかしいという印象を持つ。今回で打ち切りにしたらよい。

田中(一) 「とつかかり」という私の発言について意見が出た。私の言いたかつたのは、批判はものを生み出すためのものでなければならないのであつて、今まで様々なところでなされてきた所謂、批判が必ずしも、生産的ではなかつたため、「現状批判」について疑問をもっているのである。

小沼 モレキュール型 「Partial Wave Analysis for Pion Photoproduction」は、核研の理論部か高エネルギー部で取り上げるのが適当ではないか。

一般に他の共同利用研でも、取り上げられる可能性を、探るべきではないか。モレキュール型では決定が提案説明者の云われたミニマム以下の額のものもあるが、復活要求が出ないのはどういうわけか。

山田 本来、ミニマムはきちんと決められるものではない。少なくとも、なん

資 料

とかやつていくということだ。モレキュール型が非常に増えている。討論の仕方を考える必要がある。

長崎 共同論文の審査のようになってしまった。前もつて座長と、提案者の contact の機会を作る努力がなされるべきだ。

木下(議長) 他の共同利用研でやられるべき性質の研究会は申し入れる。

モレキュール等に関して、レフェリーの制度を取り入れる。

夏の学校に関しては、今回は、このままでゆく。

久保 質的な討論を含めて、申し入れをした方が効果的だ。

7. 研究計画の決定(Ⅱ)

議長団より修正案の提案があつた。

修正点 「……現状批判」を後半に再提案してもらう。

説明；この様な研究会の意義は認められるが、部員会としての討論も十分でないので、世話人がさらに準備を進めた上で、再提案してもらつた方がよい。

「宇宙空間物質」については世話人と連絡して調べた結果、今年度は、今年度限りということで、宇宙研で行なわれており、来年度は基研でお願いしたいということであつた。時期については12号物質の結果が出る時期との関連もあり、是非、5月とのことであつた。

修正提案の通り決定した(別紙)

その後、校費の計算費について、田中一氏から提案があつた。

「計算費の使用は校費と異なり、予定がたたないことが多い。そのため効果的な使い方をする上で、何か工夫した方がよいと思う。計算費の場合でもこれを用いる仕事は project として、研究部員会議で審査をうけなければならないが、その額の検討は別の機関を設けて検討することにしてはどうか。今回の計算費については、従来の方法でよいが、6月に具体案を作つて提案してもよい。

議長 他の共同利用研究所との関係で、旅費・計算費に関して、部員会議として意見をまとめたい。

長崎 議長から部員会議の意志を伝えてほしい。

昭和45年度前期研究計画(決定)

	テーマ	代表者及び提案説明者(○印)	旅費(要求額)	校費(要求額)	研究会 開催予定時期	備考
長期 研究 計画	1. 惑星間空間物理学と太陽系の起源の諸問題	広瀬 徹, 島村 匡, 舞原俊憲, °中沢 清	13(26)	10(10)	6月上旬と 12月上旬	(印刷費(5) + 計算費(5))
	2. 電磁相互作用と弱い相互作用からみた核構造	°広岡正彦, 大坪久夫, 高橋耕士	18(30)	254(254)	9月 or 10月	(計算費 + 賃金)
	3. 素粒子の弱い相互作用	小沼通二, 戸田 東, 中川昌美, 村山昭浩	20(40)	4(4)	12月 or 1月	(印刷費) 研究会の分を 後期に再提案
	4. 散乱理論を中心とした強い相互作用	°細田昌孝, 高木富士夫, 徳田直樹	25(50)		6月中旬と 11月中旬	
	5. 素粒子の模型と構造	石田 晋, 植原正行, 大貫義郎, °牧 二郎, 益川敏英	20(35)		9月下旬	
	長期予算小計		96(181)	394(394)		
短期 研究 計画	1. 物性若手夏の学校	田村良雄, °高山 一	10(20)		8月	
	2. Dynamical Groups の応用と批判	森田克貞, °宮崎 忠, 中沢宣也	15(20)		6月 or 9月	
	3. 1970年度3者若手夏の学校	°根本文記, 日下たかし, 小池和男		13(13)	8月上旬	(印刷費)
	4. 宇宙空間物質の研究	武谷三男, 本田雅健, °長谷川博一	20(30)	7(7)	5月末	(印刷費)
	5. 素粒子物理学の将来	野田二次男, 小柳義夫, °二宮勘輔	20(30)			
	6. 核構造 — 新しい原子核像の追求	大坪久夫, 末包昌太, 高田健次郎, 森田正人, 高木修二, 田中 一, °玉垣良三	(35)		9月中 or 上旬	後期に再提案
	7. 多体系量子論と天体	林忠四郎, 玉垣良三, 中嶋貞雄, °恒藤敏彦	9(9)		9/11~12月	
	8. 分子結晶における相転移と分子運動	°本間重雄, 山本常信, 片岡洋右, 中村 伝, 伊藤光男	10(20)		6月	
	9. 物性若手による研究会「物性物理学及びそ れにたずさわる研究者の現状批判」	稲垣 卓, 井上政義, 小川 泰, 大成逸夫, °蔵本由紀, 杉原敏夫, 永井克彦, 山田知司, 米沢富美子	(20)		7月中旬	後期に再提案
	短期予算小計		84(184)	20(20)		

	テ ー マ	参 加 者	旅 費 (請求額)	校 費 (請求額)	備 考
モ レ キ ュ ー ル 型 研 究 計 画	1. 1f-2p shell 核の構造	末包昌太, 由良忠義, 佐々木潔, 殿塚 勲, 田沢輝武	8 (15)	5 (5)	
	2. 第二種超伝導体の輸送現象及び超伝導転移点近傍でのゆらぎに関する問題	真木和美, 海沢丕道, 高山 一, 武藤芳雄, 能登宏七, 大塚泰一郎	3.5 (5.5)		
	3. 非弾性領域での「核子-核子系の Kantor 振巾」	古市 進, 末光 博, 亘和太郎, 米沢 穂 (他2~5名)	7 (10)	20 (20)	(賃 金)
	4. Generalized Potential と素粒子交換の構造	木下紀正, 志賀邦男, 江角弘道, 川崎 守, 小林正典, 末光 博	5 (6.5)		
	5. B-S 方程式による核力の分析	室田敏行, 野田松太郎, 伊藤仁之, 渡川健, 田中富士男	6 (8.5)	30 (30)	(計算費)
	6. α 的 4 体相関と分子的構造	樋浦 順, 赤石義紀, 阿部恭久, 堀内 昶, 久保寺国晴, 滝川 昇, 鈴木宣之, 根本文記, 上村正康, 福島義博	10 (15)	30 (30)	(計算費)
	7. 液体金属の電子状態の研究	渡部三雄, 遠藤裕久, 松田博嗣, 田中 実, 長谷川正之, 小川 泰, 米沢富美子	11 (15)	5 (5)	(計算費)
	8. 電子間相関と輸送現象	森 肇, 都築俊夫, 福山秀敏	4.5 (5.5)		
	9. Partial Wave Analysis for Pion Production	飴野貴明, 横見博之, 佐々木祥介, 鈴木俊郎, 中村輝男, 山下信之	6 (10)	20 (20)	
	10. 原子核における多体問題	庄野義之, 栗山 惇, 西山精哉, 宮西敬直 (+ α)	7 (10)		
	11. Wbaryon 模型による素粒子反応	芝口隆重, 若泉誠一, 松岡武夫, 坂東昌子, 豊田文彦, 吉田俊博, 二宮勘輔, 井町昌弘, 沢田昭二	7.5 (11)		
	12. Multiple Production の研究	小池和男, 森井俊之, 門田良実, 小林昭三, 小林 誠, 野田二次男, 山岸憲治, 葉 仕平, 鎌山茂徳	5.5 (8)		
	13. 核内の有効相互作用と f-pshell 核の核構造	小川建吾, 久保謙一, 永田 忍, 宇田川猛, 西山精哉, 糸永一憲, 元場俊雄	7 (10)		
	14. Progress Supplement "Statistical Physics of Random Systems" 編集と将来計画の討論	米沢富美子, 松原武生, 松田博嗣, 武野正三, 長谷川洋, 斎藤基彦, 福山秀敏	5 (6.5)		
	小 計		93 (137.5)	110 (110)	
	合 計		273 (502.5)	169.4 (169.4)	

議長 モレキュール(9) Partial Wave Analysis for Picn Photo Production は核研ESでデータを出してから Analysis を終了するまで、本来は核研のプロジェクトして取り上げるべきものだと思うが、現在の実験チーム毎にバラバラに Analysis をやっている実情を乗り越える手がかりとして、提出されたものとして、今回は特別にモレキュールを認めた。しかし、今後は核研でこの様な Analysis の問題に積極的に取り組むことを考えてほしい。

小沼 核研の核理専門委とES専門委でも考えてもらいたいが、基研と核研のチャンネルとして玉垣氏が核研小委に出ているので研究部員会議の意向として、核研小委に伝えることにしたらどうか。

玉垣 チャンネルとしては努めたい。モレキュール計画の本人にも議長から伝え、努力してもらいたい。

久保 私個人としては、この件の事情、この場の雰囲気はよく理解できたと思うので、核研に帰って報告し、議論したいと思う。

8. 所長問題

26日夜の運営委員会の報告(牧二郎氏が所長候補者として選ばれ信任されたこと)が所長から行なわれた。

議長(田中) 所長選出についての前回の議事録の「部員会議における承認」の意味がはつきりしない。これまでの所長選考の仕方の資料によれば、場合によつてやり方が変つている。

田中(一) 前回によるとすれば、原案を出して、承認していただくということだと思う。

議長 今回は前回の議事録の決定にならい、可否投票することにする。

運営委員を除いて研究部員と所員で可否の投票を行なつた。

運営委員会の原案について可否投票の結果

可	21
白 票	3
<hr/>	
	24

議長 湯川先生が所長をおやめになられても、学問的な面では従来通り、基礎

資 料

研において研究をお続けになり、我々を指導していかれるということを前提にして、これまで考えてきている。この点につき意見を出してほしい。

田中(一) 私達研究者との接触を保つていくための保障を、所内ではどのように検討しているか、退官の記念事業も含めてどう考えるか、もしそれが基研と関係するならば研究部員会議でも討論した方がよい。

牧 所員の考えは、前回、前々回にもお伝えしたが、湯川先生にはひきつづき基研に来られて、研究・指導をしていただきたいと考えている。今まで通り、今の部屋をお使いになり、これまで通りお仕事をつづけていただきたい。秘書なども今まで通りにそのままやつていただきたい。基研が手ぜまになりつつあるという点で、湯川先生は御心配かもしれないが、新館所長室も所員用に使うなど、やりくりはつくと考えている。

記念事業については、小林稔氏より、いきさつ、規模などについて報告があり、それにつき質疑がなされた。

9. 所員公募について

助 手

- ① 北門助手 4月1日付転出
- ② 米沢助手 5月1日付転出
- ③ 中野助手 45.9.1～45.8.31まで海外出張のところ
46.8.31まで出張延長となつたので、45.9.1～
46.8.31までその間を休職とし、その間だけの助手
を公募する可能性がある。

④ 教 授

湯川先生のあとの教授

以上、4つのポストについて討議していただきたい旨、所長から報告があつた。

助手について

宮沢 文部教官として外国人がとれるから、それもおもしろいと思う。東大で

では、多少てまどつたが文部教官に採用できた。

森田(章) 東北大・金研でもドイツ人が助手になつたときいている。

議長 中野さんのあとの1年という期限つきという場合、外国人ということも考えられる。

牧 中野さんのあと post doctorate fellowship 的な一年任期の助手としてきていただく。基研における duty は重くならない程度に果していただきたいということは、前回の部員会議でもでていた。

議長 短い期間の任期があるものに分野指定をするのはむずかしいのではないか。

牧 現在の状況から判断して、かなり多くの応募者があるだろうから、上の①②の方を選考し、順位をつけて③を選考という方法もある。

議長 ③は分野指定をしないで運営委員会にまかせることも考えられる。

山田 外国人をとるかどうかちやんときめておかねばならない。実際、外国に公募するとなると、相当大変だろう。

宮沢 外国人滞在費を希望している長期の人に適当な人があるかどうかを検討してはどうか。

小沼 外人の場合、一般公募はできないから、今でている4人の希望者に適当な人がいるかどうか、運営委員会で検討し、なければ今回はみおくることではどうか。

玉垣 宮沢氏の試みはいいと思うが、一つのポストに対する応募者が多い現状を考えると、今回は日本人がいいのではないか、若い人の意見を伺いたい。

湯川 外人招聘は今までなしくずしに滞在希望申し出があつたり、国際会議に出席した人に適当に使つてきた。一般に公募するとなると沢山応募があつて大変だろう。今回は両者がからまざるを得ない。切り離してここで決めるのはむずかしいのではないか。

国内では就職難(米国では日本よりもつと悪いようだが)の状況にあるので、③に外人とするのは決断しにくい状況だと、私個人としては考える。国際的になるのはいいが……。

今後は外人招聘のきちんとしたルールをつくり、受入れ態勢をはつきり

資 料

してほしい。

これまでは形式的にも実質的にもルーズだった。

小林(庸) 若手としては、人の問題なのだと考える。6月の段階で外人も日本人と同じ型で応募されたいと思われる。

宮沢 現在希望している外国人4人について適当かどうか考えて、なければ6月に外国人も日本人も一緒にして考えてはどうか。

議長 国内的なことも配慮した上で、運営委員会できめていただくのではどうか。

末包 共用利用研の助手としての役割を果たす人という点はどう考えるか、ポストのない若い人が沢山いるとき、外人をとるのがいい案とは、一概にはいえない。

牧 客員部門的なものが将来実現すれば、その方がむしろ外国人にたいする post として適当ではないか。

宮沢 今まで一方通行すぎた。外国人を受け入れることが、もつとあつてよい。

末包 一般的にはよいが、今の基礎にそのままをてはめることは出来ないだろう。

板橋 私も国内の状況を考えて、外国人にポストを使うことにはためらいを感じる。

湯川 給料も外国人招聘の場合の方が高い。外国人招聘を今までの議論を参考に、運営委員会に委せてもらえないか。

所長の提案が了承された。

助手の分野は ①、②、③ それぞれの空席に対し

① 「広い意味での素粒子論」 任期 3 ± 1.5 年

② 「広い意味での物性論」 任期 3 ± 1.5 年

③ 上記①、②のうち分野をとわない 任期 昭和45年9月1日～

昭和46年8月31日

教授について

所長から今までの所長問題の議論の中で A, B 案などがでてきているから、か

なり拘束されているのではないかという疑問がでたが、A案とは「任期5±2年で教授を公募する。その中でA₁ 新しい教授が決つて4人の教授の中から所長を選ぶA₂ 現職の3人の教授の中から所長を選ぶ」ということであったという了解をした。

分野は「広い意味での素粒子論」とする。

10. 旅費規定について

基研研究部員会議旅費規定（昭和45年4月1日より施行）

（基研で行なわれる場合で、研究会日数をnとする）

出発地	旅 客 運 賃	日 当	宿泊費
札幌	乗車券, 特急寝台, 超特急(ひかり) (上野まで)(東京→京都)	日分 n + 4	日分 n + 1
仙台	乗車券, 特急, 超特急(ひかり)	n + 2	n + 1
東京	乗車券, 超特急(ひかり)	n + 1	n
名古屋	乗車券, 超特急(ひかり)	n + 0.5	n
金沢	乗車券, 特急	n + 1.5	n + 1
広島	乗車券, 特急	n + 1.5	n + 1
博多	乗車券, 特急寝台	n + 2	n
阪神	n往復乗車券	x n	(*)

旅 費 ○ 50才未満の人は運賃を普通料金とする。

○ 50才以上の人は新幹線以外の運賃をグリーン料金とする。

宿泊費 ○ 40才未満の人は上限を1泊1,000円とし、実質とする。

○ 40才以上の人は上限を1泊2,000円とする。但し北白川学舎を利用された場合は、一律1泊1,000円とする。

○ 阪神地方の人で宿泊を希望される場合は宿泊日分の宿泊費を出す。
(但し、交通費は実往復数)。

日 当 1日の日当は1,000円とする。但し、実状にそつて世話人が変更する場合もある。(阪神のxは大体 $\frac{1}{2}$ がふつうです。)

資 料

アトム型研究員の日当については差をつけることをやめることにした。一律に800円とした。

京都大学基礎物理学研究所協議員会規程の一部改正について

京都大学基礎物理学研究所協議員会規程一部改正（案）

京都大学基礎物理学研究所協議員会規程の一部を次のように改正する。

第2条を次のように改める。

第 2 条 協議員会は、次の各号に掲げる者で組織する。

- 1 基礎物理学研究所所属の教官
- 2 前号以外の京都大学在職の教官のうちから所長の委嘱した者若干名

附 則

この改正規程は、昭和45年4月1日から施行する。

改 正 理 由

基礎物理学研究所における運営と共用利用の経験にかんがみ、かつ、最近における基礎物理学の急速な進展に即応するため、同研究所協議員会に同研究所所属の教官のほか、広く関係の各専門分野の研究者を加える必要があるので、所要の改正を行なおうとするものである。

なお、人事に関する事項については、従来から運営委員会において審議され、方針を決定した後協議員会に附議されており、協議員会は、運営委員会の審議の結果を尊重してきているが、今後この点は同様である。

新 旧 対 照 表

現 行	改 正 後
<p>(前 略)</p> <p>第2条 協議員会は、次に掲げる 者で組織する。</p> <p>基礎物理学研究所教授並びに所 長の委嘱した京都大学教授若干 名。ただし、助教授を加えるこ とができる。</p> <p>(後 略)</p>	<p>第2条 協議員会は、次の各号に掲 げる者で組織する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 基礎物理学研究所所属の教官 2 前号以外の京都大学在職の教 官のうちから所長の委嘱した者 若干名 <p>附 則</p> <p>この改正規程は、昭和45年4月 1日から施行する。</p>

第50回 運営委員会議事録

1970年2月26日 午後7時～

議長 湯川 秀 樹

出席者 運営委員（井上 健，内山竜雄，高木修二，森 肇，碓井恒丸，
豊沢 豊，松原武生，永宮健夫，田中 一，小川修三，小林 稔，
牧 二郎，松田博嗣，玉垣良三），事務長

欠席者 坂田昌一

- 議題
1. 所長問題に関する研究部員会議報告
 2. 所長候補者選考
 3. 昭和45年度併任教授について
 4. 湯川奨学生選考

1. 所長問題に関する研究部員会議報告

湯川所長から部員会議の経過が報告され、これに関連して以下のような議論が交わされた。

田中 「今回限り」という意味は？

湯川 今は過渡期であるから，ここで決められたことは再検討するということである。

牧 一般に今後，所長の選考については，これをもとにするということはない。今回についてはこうするという意味。

田中 その時の事情によつてA，B又はCをとりうる。今回はこれに基いて行なり。次回を拘束しないということですね。

湯川 部員会議の議事録にあるように「適用は今回に限る」でいいでしょうね。

田中 任期については決りましたか？

湯川 議論がなかつたから，前の通りでいいと解する。

田中 Aの場合の所長が重ねて選ばれると，これまでの議論に矛盾する。その場合は限度を考えねばならないだろう。今回はまあ，考えなくていいだろうが。

内山 実際 A と決めた場合、即ち A_2 ということだと思ふ。

田中 A_2 をとるとしても、公募して適当な人があつたら、2年後に選ばればよい。

内山 A_1 で選ばれて所長になるにしても、外部から入つてすぐ基研の所長になるのはむずかしいだろう。

牧 A_1 の場合、選ばれた人は少なくとも $\frac{1}{4}$ の可能性を覚悟して、入つてこられるが、今の3人は違うという面もある。

湯川 脱線するが、Bは場合によつて非常に中途半端である。定年までいていただく可能性もある。

湯川 2年という任期は過渡期としてである。2年で先の見通しがでてくるところを希望している。

内山 2年たてば新しく着任した教授も慣れるだろう。

田中 しばらくたてば、皆さんの期待される指導性というものも変わると思う、指導性にも色々のタイプと場合がある。

内山 Yukawa effect もうするだろうし、2年たてば所長のイメージも変わるだろう。

湯川 A_2 で進めていいか否か。

内山 森田(正)氏の発言にあるような A_2 の拡大 (A_3) は部員会議でサポートされなかつたのか。

牧 部員会議で申し上げたように、この例ではBに入るのではないか、特殊な例として数理解析研の例があるが、共同利用研の所長が一方では、他の学部の専任としてその大学の管理運営に加わつており、他方でこちらを併任というのは、はつきりしない。

内山 前回、私もA案を提案したのだが、被選挙人が3名では選ぶ範囲が狭いので、併任教授を加えることを考えたかどうかと思つたのだ。

田中 私は、前回 A_2 という場合は専任とは言わなかつたかもしれないが、現職3人と申し上げたと思う。

碓井 $\frac{1}{3}$ とか $\frac{1}{4}$ とかいう確率の数値がでていた。

田中 一つの新しい案として、出されるのなら考えられる。

内山 併任も現職に違いないので、固執しないが、その可能性を質問したまで

資 料

である。前回、確率まででていたのなら、もとにもどることになるので取り下げる。

森 A案で新しく教授をとるとなると、若い人をとると考えられる。
今の教授の方が着任されたのが、3・4年前ということを考え合わせると、どうしてもA₂になると思う。

湯川 そう任期制のことを考えると、若い人でしょうね。

田中 今回、モレキュールやアトム型の応募が増えているのは、基研の新しい方向を示しているようですね。

A₁にするか A₂にするか、採決投票した。

A ₁	1
A ₂	13
白票	1
<hr/>	
	15

湯川 A₂として選考する場合、具体的に手順をどうするか。

田中 まず投票してから考えてもよい。

湯川 その結果、信任投票をする必要があるかどうか。

牧 運営委員の互選でなく、この中の3人の中から選ぶのだから、3人は、退席して、それぞれについて議論する方法もある。

内山 議論しないで、結果について信任をする。

永宮 先に議論をすると選ばれた方が大変責任が重い。

松原 教室主任のような軽い気持でやつていただいた方がいいと思う。だから議論しない方がいいと思う。

以上のような討論がなされた後、投票が行われた。

投票結果	牧	10
	松田	4
	白票	1
<hr/>		
		15

投票の結果、 $\frac{2}{3}$ 以上の支持が集まったので、信任投票をどうするか議論がかわされた。結果かでてから信任、不信任を問うて、否という票ができれば、それを不適任ということになり、まずいのではないかという意見が出た。

碓井 2/3 以上の支持があつたのだから信任投票の必要がないともいえる。

永宮 念のためなら、結果をみてからの再投票という手もある。

田中 基研の分野は素粒子・物性が、2:1 だということを考慮して、信任投票しておいた方がいいのではないか。

湯川 皆さんがよかろうと全員納得したところで、支持していただいた方が、今後何かにつけていいと思う。

結局、信任投票を行なうことになった。

信任投票の結果

可 14

白票 1

15

田中 前回の部員会議議事録では、所長候補者の原案を示し、承認を求めることになつていた。

湯川 先程、決まつた候補者の名前を原案として、研究部員会議に提案することになります。

3. 昭和45年度併任教授について

昭和45年度は以下の7氏にお願いすることになった。

早川幸男 碓井恒丸 高木修二 小林 稔 松原武生
井上 健 片山泰久

4. 湯川奨学生選考

素粒子・原子核関係 若泉誠一 関根松夫

補欠順位 堀 節子 成田真二 小林正典

物 性 関 係 垣谷俊昭

補欠順位 本間重雄^{*)} 大畠永生 片岡光生

年度の前半において補欠の人がくり上がる可能性がある。

*) 運営委員会の後、就職されたので補欠順位がくり上がる。

Ⅱ．昭和45年2月28日（土） 午前10時30分

議 長 湯 川 秀 樹

出席者 田中 一，豊沢 豊，永宮健夫，内山竜雄，小川修三，森 肇，
小林 稔，松原武生，井上 健，高木修二，碓井恒丸，牧 二郎，
松田博嗣，玉垣良三，事務長

欠席者 坂田昌一

- 議 題
1. 研究部員会議の報告と承認
 2. アトム型研究員選考
 3. 所員補充の件
 4. 協議員会規定改正の件
 5. 運営委員欠員補充について
 6. 昭和46年度概算要求について

1. 研究部員会議報告と承認

所長から報告が行なわれ，以下のような補足意見が出され承認された。

○ 所長問題について

昭和32年6月制定の所長候補者選考規程によれば，第7条に「所長の任期は4年とする」という項があるが，今回は申し合せて，任期2年とする。今後1～2年の間に規程をかえるかどうか討議をすることになった。

○ 新研究部員承認について

大学別に分けたのは問題が残るのではないかという意見があつた。あまり詳細なことを操作しないで，やはり抽選にした方がいいのではないかという意見もあつたが承認された。

○ 研究計画について

計算費についてもしかるべき機関をつくつて，機動的に運営してゆかねばならない。所外の人も含めて検討する機関をつくることを議長団・所員で検討していただく。

○ 外人招聘について

今回は候補者（滞在希望者）が多数あつたが，以下の方々を招聘すると

とになった。

・素粒子関係

M.Flato (H.Poincare Inst.)	70年8月	1ヶ月	*)
N.M.Nieto (Niels Bohr Inst)	71年	max. 3ヶ月	
D.B.Lichtenberg (Indiana)	70年9月	1	
J.Schwinger (Harvard Univ.)	70年4月～5月	1	
L.Halpern (Windsor, Canada)	70年7月	1	

・原子核関係

J.Eichler (H.Meitner Inst)	70年8～10月	2	
M.Harvey (Chalk River Lab.)	70年4月	1	

・物性関係

P.C.Hohenberg (Bell Telephone Lab.)	70年9月	1	
D.Pines (Univ. of Ill.)	70年9月	1	
A.A.Abrikosov (Academy of Sci. USSR)	70年9～10月	1	**)
S.Choi (Univ of N.Carolina)	70年7月	1	
H.Meyer (Duke Univ.)	70年9～10月	1	**)

*) 71年度又は71年3月からでもよい。

**) 決定後都合で来日不可能という連絡が来た。

尚、Fellowship 的なポストへの希望者は、今回は短期の滞在者でい
っぱいなので、日本学術振興会の外国人奨励研究員に応募される様勧める
ことになった。(基研を host Institute とする可能性もある。)

2. アトム型研究員選考

今回は応募者が多く、予算の枠の約4倍に達したので、次のような考え方で選考が行われた。

- (1) 初めての人を優先する。
- (2) 滞在期間は1ヶ月を限度とする。
- (3) 本年4月～9月以外の期間の希望については、今回は考えない。
- (4) 研究部員の方は、年3回基研に来所される機会があるので、今回のよう

資 料

に応募が多い時は、遠慮していただく。

- (5) モレキュール型研究会で、基研に来る機会の多い人は遠慮していただく。
- (6) D 1 の人は、今後の機会を利用していただけると思うので、本年度後半以降に再応募していただく。
- (7) 京大計算センターの利用をかねて来られる場合には、旅費は大型計算センター利用旅費で来ていただき、基研からは滞在費のみを出す。
- (8) 奨学生的アトム型は、昨年度同様採用しないことになっているので、それに準ずる形になっている場合は、昨年度同様考慮の外におく。

4 5 年度前期アトム型研究員に決定した方々は次のとおり。

林	憲 二 (東大・教養, 助手)	1 ケ月
塚 田	捷 (東大・理, D 3)	1 ケ月
八 幡	英 雄 (東大・理, D 2) 滞在費のみ	1 ケ月
斎 藤	光 雄 (北大・理, D 3)	1 ケ月
樋 渡	保 秋 (金沢大・理, 助手)	1 ケ月
阿 部	恭 久 (北大・理, 助手)	1 ケ月
長谷川	俊 一 (早大・理工, 助教授)	1 ケ月
木 谷	幸 平 (東北大・理, D 3)	1 ケ月
池 田	清 美 (東大・理, 助手)	1 ケ月
笠 原	克 昌 (早大・理工, D 2)	1 ケ月
白 藤	孟 志 (埼玉大・理工, 助手)	1 ケ月
長谷川	政 美 (名大・理, D 2)	1 ケ月
Amar Maheshwari (東大・学振外国人研究員)		1 ケ月
五十嵐	饒 孝 (東大・理, D 2)	1 ケ月
川 端	親 雄 (岡山大・理, 助手) 滞在費のみ	1 ケ月
近 藤	弘 樹 (佐賀大・理工, 助手)	1 ケ月
森 井	俊 行 (阪大・基礎工, D 2)	1 ケ月

3. 所員補充の件

- ① 北門助手の後任 「広い意味での素粒子論」 任期 3 ± 1.5 年
- ② 米沢助手の後任 「広い意味での物性論」 任期 3 ± 1.5 年

③ 中野助手の休職期間（1970年9月1日～1971年8月31日）中の
助手

上記①，②の分野とし

「専門分野は特に指定しない」 任期 1年

③の助手のポストに関しては「外国人にしてはどうか」という話が研究部
員会議から持ち越されたが、その可能性を検討したが、實際上、種々の困難
が予想されるので、今までどおり公募することになった。外国人からの応募
も排除しないということになった。

④ 教授

「広い意味での素粒子論」 任期 5 ± 2年

教授の場合、運営委員会の席上で出される場合も考える。しかし、判
断の資料が必要なこともあるので、前もって出されることが望ましい。

4. 協議員会規程改正の件

現行の第二条「協議員会は、左に掲げる者で組織する。

基礎物理学研究所教授並びに所長の委嘱した京都大学教授若干名。た
だし、助教授を加えることができる」

を、下記のように一部改正することが提案され、異議なく了承された。

改正される第二条「協議員会は、次の各号に掲げる者で組織する。

1. 基礎物理学研究所所属の教官
2. 前号以外の京都大学在職の教官のうちから所長の委嘱した者若干名」

5. 運営委員欠員補充について

所長がかわり、新所長が決つたことなので、次にみおくことにした。

6. 昭和46年度概算要求について

所長が交替することもあり、今回は新しいイメージを打ち出すにはいい
機会であるから、よく練り直して、データをそろえて出していつたらどうか
という意見が出された。

文責 林 千 歳

資 料

基研研究部員会議議長選挙開票結果

- 開 票 基研 共同利用事務室（片岡，井家）
- 有権者総数 51名
- 投票者総数 43名
- 有効得票数 125 （3名連記 白票 4）
- 得票順位及び得票数

素粒子・原子核関係			物 性 関 係		
①	大 貫 義 郎	24	①	芳 田 奎	17
②	長 崎 正 幸	12	次 ₁	渡 辺 三 雄	5
次 ₁	山 口 嘉 夫	8	次 ₁	中 野 藤 生	5
次 ₂	中 野 重 夫	7	次 ₁	森 田 章	5

上記の様な結果が出ましたので、1970年度の研究部員会議議長は、大貫義郎，長崎正幸，芳田 奎 の3氏にお願いすることになりました。

片 岡 韶 子

掲 示 板

お茶の水女子大学 物理学教室

助教授（または講師）公募

当教室では次の要領により教官を公募致します。適任者の推薦，希望者の応募をお願い致します。

- 1) 公募人員 助教授または講師 1 名
- 2) 専攻分野 理論，ただし専門は問わない。
- 3) 公募締切 昭和 4 5 年 6 月 3 0 日
- 4) 提出書類

a) 推薦の場合

1. 推 薦 書
2. 略 歴 書
3. 業績の概要

b) 応募の場合

1. 履 歴 書
2. 業績リスト
3. 将来の研究計画
4. 本人についての照会に答えて頂ける方の氏名（2 名以上）

連絡先 東京都文京区大塚 2 丁目 1 ～ 1 （郵便番号 1 1 2）

お茶の水女子大学 理学部 物理学教室 主任

石 黒 英 一

電話 （03）－943－3151

備考 適任者がいないときは採用を保留します。

Report on Progress in Lattice Dynamics
in Japan の原稿募集

1969年秋、日本における結晶格子力学の研究状況と成果を海外に広く、且つ早く知らせることを目的として、Report on Progress in Lattice Dynamics in Japan (RPLDJ) の第1号を刊行いたしました。内容は各研究グループのアドレスとメンバーリスト、主な研究テーマ、研究活動の状況と最近の成果の概要、及び、発表論文リスト、の4つからなっています。年1回発行の予定で、目下第2号を準備中です。

刊行の際、十分準備したつもりですが、なお遺漏があつたことをおそれます。前回御案内をさしあげなかつた方で、寄稿を希望される方は、ふるつて原稿をお寄せいただきたいと存じます。各項目の書き方については下記を御参照下さい。

- (1) グループのアドレスとメンバーリスト： グループのメンバーが地域的に集中している必要はなく、また複数である必要もない。各メンバー毎にアドレスを記すこと。
- (2) 主なテーマ： 簡単に箇条書きにする。
- (3) 研究活動の状況と最近の成果の概要： 研究のフィロソフィー、プロジェクト及び成果のアウトラインをタイプ (double space) で、2〜3枚にまとめる。はつきりした結論を得るに至らない研究や、スペキュレーションなども含めてよい。
参考論文リストを付してよいが、必要最少限度にすること。
- (4) 発表論文リスト： 筆者名、表題、雑誌名、または書名、巻 (年) ページの順に記して下さい。略記法は、Journal および JJAP 投稿規定に準じること。

締切は1970年8月30日とします。なお、RPLDJの第1号を御希望の方は下記にお申しこみ下さい。但し残部は少数なので先着順にさせていただきます。

連絡先 札幌市北10条西8丁目北大理学部
物理学教室 堀 淳 一

電話 0122-(71)-2111, 内線2687

基 研 研 究 部 員 会 議 議 題 募 集

基礎物理学研究所研究部員会議が6月下旬頃行なわれる予定ですので、議題がございましたら提案・趣旨とともに5月31日必着で下記にお申し込み下さい。

京都市左京区北白川追分町

京都大学基礎物理学研究所

研究部員会議議長団

代理 片 岡 韶 子

基 研 研 究 計 画 ア ト ム 型 研 究 員 募 集

京都大学基礎物理学研究所

所長 牧 二 郎

昭和45年度後期の基研研究計画及びアトム型研究員を下記のように募集致します。従来の長期・短期・モレキュール型研究計画の外に、形式・内容共に新しい研究計画の応募も歓迎致します。

又、アトム型研究員は、大学院生を含む研究者を対象とし、個人が当研究所に滞在して研究を続けていただくものです。多くの方がアトム型研究員として基研で研究されることを希望致します。

記

1. 応募必要事項（適当な用紙に御記入下さい）

A 研究計画

長期研究計画（あるテーマについて数ヶ月から1年にわたって連絡をとりつつ研究を行なうもので、普通年1～2回研究会を行なっている）。

短期研究計画（あるテーマについて数日間研究会を行なう）。

モレキュール型研究計画（数人が随時連絡をとりつつ研究を行なう）。

等の研究計画が従来出されていますが、これらにとらわれない新しい型の研究計画の応募も歓迎致します。

イ) 研究テーマとその内容

(内容については主旨及び問題点を明確に書いて下さい。)

ロ) 世話人及び提案説明者

世話人として主な研究計画立案者を二人以上あげ、その中の一人を連絡責任者として指定して下さい。6月下旬の基研研究部員会議で提案の説明をしていただきますので、提案説明者をきめて下さい。

尚、基研研究部員が参加者にいる場合はなるべく研究部員が提案説明をしてくださることを希望致します。

ハ) 研究会及びその他の会合の開催希望時期

ニ) 研究会及びその他の会合に参加する研究者の予定数

ホ) 旅費及び校費の必要額

(項目別に明記して下さい。)

B アトム型研究員

従来アトム型研究員は1月末、5月末の年2回募集しておりましたが、45年度は9月末にも募集致します。

尚、他の研究計画と関連させて申し込まれる場合はその旨明記して下さい。

イ) 所属、身分及び連絡先

ロ) 研究計画

(計画の内容、基研に来る目的をなるべく具体的に御記入下さい。)

ハ) 滞在希望時期及び期間

滞在期間は原則として1ヶ月～1年となつておりますが、場合によつては2週間程度でも結構です。

(今回は昭和45年10月から昭和46年3月の方を募集します。)

応募者が一時期に殺到し、基研の収容能力をこえる場合は一部時期の変更をお願いすることもあります。

(昭和44年度の利用者は滞在1ヶ月が13人、40日が3人、2ヶ月が9人でした。)

2. 予 算

未だ予算は確定していませんが、昨年度の例から考えますと、後期分として

旅 費 170万円 校 費 130万円

位が見込まれます。

3. ✂ 切

5月31日（必着）

基礎物理学研究所研究部員会議及び運営委員会（6月下旬又は7月上旬）で決定します。

4. 宛 先

京都市左京区北白川追分町

京都大学基礎物理学研究所 共同利用事務室

尚、封筒の表に研究計画又はアトム型研究員応募と明記して下さい。

人のうごき

- 戸 田 盛 和 氏（東京教育大学・理）

5月より明年1月まで São Paulo 大学に滞在

- 小 暮 陽 三 氏（埼玉大・教育）

同 上

- 遠 藤 将 一 氏（京大工）

4月1日より北大理・物理・高圧物理研究室に配置換

- 間々田 博 司 氏（東京教育大）

4月より名大・工・航空学科へ赴任

2. 予 算

未だ予算は確定していませんが、昨年度の例から考えますと、後期分として

旅 費 170万円 校 費 130万円

位が見込まれます。

3. ✕ 切

5月31日(必着)

基礎物理学研究所研究部員会議及び運営委員会(6月下旬又は7月上旬)で決定します。

4. 宛 先

京都市左京区北白川追分町

京都大学基礎物理学研究所 共同利用事務室

尚、封筒の表に研究計画又はアトム型研究員応募と明記して下さい。

人のうごき

- 戸 田 盛 和 氏(東京教育大学・理)

5月より明年1月まで São Paulo 大学に滞在

- 小 暮 陽 三 氏(埼玉大・教育)

同 上

- 遠 藤 将 一 氏(京大工)

4月1日より北大理・物理・高圧物理研究室に配置換

- 間々田 博 司 氏(東京教育大)

4月より名大・工・航空学科へ赴任

ニュース

物性談話会（北大）

1月23日 斎藤喜彦氏（東大物性研）

X線の異常分散の応用

2月13日 寺本英氏（京大理）

Maxwell の Demon の話

3月17日 毛利信男氏（北大理）

複雑な結晶構造をもつ遷移金属間

合金の磁性

お断り

本誌 Vol 13 No.6 掲載の海外だより「伊豆山→金沢」の手紙は随所に中略がありますので、全文の如く取つて誤解されませんよう、謹んでお断わり致します。

（編集部）

プレプリント案内

〔東北大・工・応物，桂〕

- Kinetic Equations and Time Correlation Functions of Critical Fluctuations (Kyozi Kawasaki)
- Sound Attenuation and Dispersion near the Liquid-Gas Critical Point (Kyozi Kawasaki)
- Spin Correlation and Entropy (H.Falk and Masuo Suzuki)

ニュース

物性談話会（北大）

1月23日 斎藤喜彦氏（東大物性研）

X線の異常分散の応用

2月13日 寺本英氏（京大理）

Maxwell の Demon の話

3月17日 毛利信男氏（北大理）

複雑な結晶構造をもつ遷移金属間

合金の磁性

お断り

本誌 Vol 13 No.6 掲載の海外だより「伊豆山→金沢」の手紙は随所に
中略がありますので、全文の如く取つて誤解されませんよう、謹んでお断わ
り致します。

（編集部）

プレプリント案内

〔東北大・工・応物，桂〕

- Kinetic Equations and Time Correlation Functions of
Critical Fluctuations (Kyozi Kawasaki)
- Sound Attenuation and Dispersion near the Liquid-Gas
Critical Point (Kyozi Kawasaki)
- Spin Correlation and Entropy
(H.Falk and Masuo Suzuki)

ニュース

物性談話会（北大）

1月23日 斎藤喜彦氏（東大物性研）

X線の異常分散の応用

2月13日 寺本英氏（京大理）

Maxwell の Demon の話

3月17日 毛利信男氏（北大理）

複雑な結晶構造をもつ遷移金属間

合金の磁性

お断り

本誌 Vol 13 No.6 掲載の海外だより「伊豆山→金沢」の手紙は随所に中略がありますので、全文の如く取つて誤解されませんよう、謹んでお断わり致します。

（編集部）

プレプリント案内

〔東北大・工・応物，桂〕

- Kinetic Equations and Time Correlation Functions of
Critical Fluctuations (Kyozi Kawasaki)
- Sound Attenuation and Dispersion near the Liquid-Gas
Critical Point (Kyozi Kawasaki)
- Spin Correlation and Entropy
(H.Falk and Masuo Suzuki)

- On the Magnetic Phase-Boundary of the Spin- $\frac{1}{2}$ Heisenberg Ferromagnetic Model
(G.A.Baker, Jr. and J.Eve and G.S.Rushbrocke)
- On the High Density Limit of Heisenberg- and Ising Ferromagnets (Th. Niemeijer)
- Entropy Inequalities (Huzihiro Araki and E.H.Lieb)
- Specific-Heat, Critical-Singularity Rounding due to Lattice Compressibility
(G.A.Baker, Jr. and J.W.Essam)
- Some Expansion Coefficients with Application to Padé Approximant and Cumulant Method
(C.Kawatata, M.Suzuki and S.Hitotumatu)
- Magnetic Susceptibility for the Half-Field Hubbard Model (Minoru Takahashi)
- The Rigorous Theorems for the Heisenberg Ferromagnets (Taro Asano)

[東北大・工・応理. 守田]

- Hard Sphere Gas in the First Covering Sphere Approximation (A.Sabry)
- On Fluids of Particles With Short Range Repulsion and Weak Long Range Attractive Interaction II: The Two Particle Distribution Function
(John B.Jallickee and Arnold J.F.Siegert)
- The Role of Droplets and Bubbles in the Condensation of the One Dimensional Gas of Kac, Uhlenbeck and Hemmer (J.B.Jallickee and F.W.Wiegel)
- On the Derivation of the Bell-Hirota Representation of the Partition Function for Interacting Bosons
(J.B.Jallickee and F.W.Wiegel)

プレプリント案内

[東大・理, 久保]

- Spatial Dependence of a Superconductive Order Parameter with Kondo Effect (Toshio Soda)
- A Note on a Distribution of Relaxation Time in Ferroelectrics near the Curie Temperature (Takeo Matsubara)
- Theory of Translational and Orientational Melting with Application to Liquid Crystals (I) (Kenji K. Kobayashi)
- Pairing Treatment of Interacting Localized Moments in Dilute Magnetic Alloys (R.H. Parmenter)
- Treatment of Pairing in Many-Body Systems by an Equation-of-Motion Method (R.H. Parmenter)
- Entropy Inequalities (Huzihiro Araki and E.H. Lieb)
- Some Expansion Coefficients with Application to Padé Approximant and Cumulant Method (C. Kawabata, M. Suzuki and S. Hitotsumaru)
- Observation of Zero-Point Spin Deviation in Antiferromagnetic $K_3Fe(CN)_6$ (K. Ono, M. Shinohara, A. Ito, N. Sakai and M. Suenaga)
- Raman Scattering by Magnons in Rare Earth Metals (M. Inoue and T. Moriya)

[東大・教養, 斎藤]

- The Rigorous Theorems for the Heisenberg Ferromagnets (T. Asano)

[名大・理・物理]

- Distribution of Eigenfrequencies for the Wave Equation in a Finite Domain
1-Three-Dimensional Problem with Smooth Boundary

Surface (R.Balian and C.Bloch)

- Theory of Magnetic Impurities in Superconductors II:
Depression of the Transition Temperature
(E.Muller-Hartmann and J.Zittartz)

編 集 後 記

今年は3月頃から全国的に天候が少し不順のようです。京都に於ても桜の開花がおくれていましたが、花の命は短く、もう殆んど散つてしまつたようです。

さて、「物性研究」懸賞論文の締切も漸く終り、3月、4月の編集会議は、その内容の検討に可成時間をかけました。

編集員一同色々議論致しましたが、結果に於ては別の形で発表される予定です。唯純学術論文の中に一致して推せん出来る優秀なものがあるか、否か、編集員一同判断がつきかね、結局の所レフェリーを選んで、その人達の意見を聞くことになりました。懸賞論文募集要項の中に“狭い領域内のみでの職人的な仕事に陥りかちな傾向を除き、活潑な研究の推進をはかるためには、たとえ未完成でも重要な問題、他の分野との関連等を提起し示唆するような論文の投稿を求める……”とありましたが、今後もこのような論文が投稿されることを期待致しています。一昨年当りから学問の本質等に就てより根本的な立場から色々な問題が提起されて来ましたが、これにこたえ得るような論文が投稿されることは、多くの貴重なエネルギーを費した大学、科学のあり方等に対する運動を無駄にしないことの一つであろうと思つています。そのためには矢張現在の困難な状況の中から若い研究者の人達が、特に飛躍されることが望ましいと思います。

新年度に入り、編集員として精力的に活躍された米沢さん、本間さんが夫々東工大、各大に近く移られることになりました。それに代り学振奨学生として京大理学部から基研に来られた石井さんと、京大教養部の越野さんに新に京都編集員を御願ひすることになりました。(S.T. April 24, 1970)

Surface (R.Balian and C.Bloch)

- Theory of Magnetic Impurities in Superconductors II:
Depression of the Transition Temperature
(E.Muller-Hartmann and J.Zittartz)

編 集 後 記

今年は3月頃から全国的に天候が少し不順のようです。京都に於ても桜の開花がおくれていましたが、花の命は短く、もう殆んど散つてしまつたようです。

さて、「物性研究」懸賞論文の締切も漸く終り、3月、4月の編集会議は、その内容の検討に可成時間をかけました。

編集員一同色々議論致しましたが、結果に於ては別の形で発表される予定です。唯純学術論文の中に一致して推せん出来る優秀なものがあるか、否か、編集員一同判断がつきかね、結局の所レフェリーを選んで、その人達の意見を聞くことになりました。懸賞論文募集要項の中に“狭い領域内のみでの職人的な仕事に陥りかちな傾向を除き、活潑な研究の推進をはかるためには、たとえ未完成でも重要な問題、他の分野との関連等を提起し示唆するような論文の投稿を求める……”とありましたが、今後もこのような論文が投稿されることを期待致しています。一昨年当りから学問の本質等に就てより根本的な立場から色々な問題が提起されて来ましたが、これにこたえ得るような論文が投稿されることは、多くの貴重なエネルギーを費した大学、科学のあり方等に対する運動を無駄にしないことの一つであろうと思つています。そのためには矢張現在の困難な状況の中から若い研究者の人達が、特に飛躍されることが望ましいと思います。

新年度に入り、編集員として精力的に活躍された米沢さん、本間さんが夫々東工大、各大に近く移られることになりました。それに代り学振奨学生として京大理学部から基研に来られた石井さんと、京大教養部の越野さんに新に京都編集員を御願ひすることになりました。(S.T.April 24, 1970)

物 性 研 究

第 1 4 卷 第 2 号

1 9 7 0 年 5 月 2 0 日 発行

発行人 松 田 博 嗣

京都市左京区北白川追分町

京都大学湯川記念館内

印刷所 昭和堂印刷所

京都市上京区上長者町室町西入

TEL (441) 1659 (431) 4789

発行所 物性研究刊行会

京都市左京区北白川追分町

京都大学湯川記念館内

購読規定

個人購読

1. 会費 当会の会費は前納制をとっています。したがって3月末までになるだけ(1年間分会費を御支払い下さい。なお新規購読の場合は下記の会費以外に入会金として、100円お支払い下さい。

※ 1年間の会費

1st volume	960円
2nd volume	960円
計	1,920円

(1年分まとめてお支払いが困難の向きは1 volume 分ずつでも結構です。)

2. 支払いの際の注意：なるべく振替用紙を御利用の上御納入下さい。
なお通信欄に送金内容を必ず明記して下さい。
3. 雑誌購読者以外の代理人が購読料を送金される場合、必ず購読者本人の名前を明記して下さい。
4. 誌代の支払遅滞の場合：当会の原則としては、正当な理由なく2 Vol. 以上の誌代を滞納された場合には、送本を停止することになっていきますので御留意下さい。
5. 一括送本を受ける場合：個人購読中に大学等で一括配布を受けるようになった場合は、必ず「個人購読中止、一括配布希望」の通知をして下さい。逆の場合も同様です。
6. 送本先変更の場合：住所、勤務先の変更等送本先が変わった場合は、必ず送本先変更届を提出して下さい。

学校、研究所等機関購読

1. 会費：学校・研究所等での購読及び個人であっても公費払いのときは機関会員とみなし、代金は1 Vol. 1,800円です。この場合、入会金は不要です。学校、研究所の会費の支払いは後払いでも結構です。しかし購読申込みをされる時に支払いに必要な請求見積、納品書各何通必要なのかをお知らせ下さい。なお、当会の請求書類では支払いができない様でしたら、貴校貴研究機関の請求書類を送付して下さい。
2. 送本中止の場合の連絡：発行途上にある volume の購読途中中止は認められません。購読中止される場合には、1ヶ月前ぐらいいに中止時期を明記して「購読中止届」を送付して下さい。

物 性 研 究 14-2 (5月号) 目 次

◎ 液体の Pair Interaction Potential 1. Born-Green の積分方程式	福田 興作	51
◎ 古典液体系の熱的素励起— Itenerant Oscillator Model—田中 実		62
◎ Heisenberg 強磁性体に関する厳密な諸定理	浅野 太郎	72
◎ 講義ノート 核と物性の境界領域	森田 正人	97
◎ 資 料 第49回研究部員会議議事録		132
第50回運営委員会議事録		159
◎ 掲 示 板		168
◎ 人のうごき		172
◎ ニ ュ ー ス		173
◎ お 断 り		173
◎ プレプリント案内		173
◎ 編集後記		176

物 性 研 究 14-2 (5月号) 目 次

◎ 液体の Pair Interaction Potential 1. Born-Green の積分方程式	福田 興作	51
◎ 古典液体系の熱的素励起— Itinerant Oscillator Model—田中 実		62
◎ Heisenberg 強磁性体に関する厳密な諸定理	浅野 太郎	72
◎ 講義ノート 核と物性の境界領域	森田 正人	97
◎ 資 料 第49回研究部員会議議事録		132
第50回運営委員会議事録		159
◎ 掲 示 板		168
◎ 人のうごき		172
◎ ニ ュ ー ス		173
◎ お 断 り		173
◎ プレプリント案内		173
◎ 編集後記		176